恵川を渡り玖波に

明治新開と村の建直し

玖波村の恵川河口と黒川村の大膳川河口との間、中浜沖の近道浜通り沿い干潟を干拓した新開が明治元年に完成した明治新開です。

玖波村は文久２（１８６２）年、頭庄屋・和田吉左衛門へ「玖波村難渋取直しのため新開築調を願出る書付」を提出しました。

この願いによると、当時の玖波村は「当村は諸産品集まり、出入りの商船多く繁盛していたが、周防新港が開港の上、天保１４（１８４３）年の大火で町内過半数焼失し、その困窮は極に達し・・・」という状況に置かれていたことが分かります。

長州の役が終わった慶応３（１８６７）年郡役所は、玖波・黒川両村の戦禍に苦しむ農民の救済事業として干拓事業を始めるため、普請頭取に和田吉左衛門を命じた。

村人は鍬ともっこを使って、僅か一年半で恵川を付け替え、長さ約１３００ｍの堤防を築きました。

昭和３年当時の恵川

郡役所―享保の一揆の為に、享保３（１７１８）年に、藩が旧に復して設置した代官所のこと。租税をはじめ、一切の事務をした。佐伯郡の郡役所は廿日市に置かれていた。

ところが村人の頑張りにより完成した新開は、明治7年、17年、21年、昭和17年と台風や暴風雨のため決壊し、耕地を欲した人々の期待は無惨にも何度も打ち砕かれました。

戦後になり、農林省の干拓事業として再開され、昭和35年に竣工しました。5万6千坪弱の農地は用途が変更され、昭和36年、三井東庄化学工業株式会社大竹工業所の誘致が決定しました。

称名寺の窟観音

22 称名寺の窟観音

称名寺の開基は、天文７（１５３８）年で「僧圓達開基、境内に岩窟あり、石仏を置く」と「芸藩通志」に記されている。

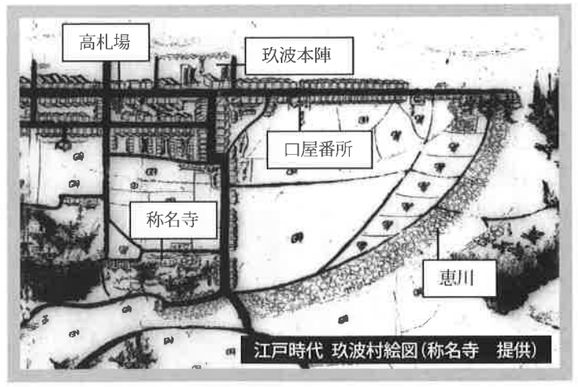
江戸末期か明治の初め頃、岩窟が崩れたため、石仏三十三観音を境内西側の山裾に祀った。不動明王が三十三観音菩薩群を見守るように中央上部におられる。

正面左端に石灯籠があり、それに「西国連中」と刻まれている。その西隣に観音菩薩像があり、往時の盛んな観音信仰の名残を留めている。三十三体の観音像の多くに番号が刻まれており、一ヵ所にまとめて観音霊場三十三ヵ所巡拝を可能にしたものだったろう。

玖波の人々が大きな慈悲に接しつつ、多難な世を乗り越えて生き続けた歴史を今に伝えているものといえる。

また、称名寺は長州の役では幕軍（彦根藩）の本陣になったと現住職の祖父が記録している。

江戸時代 恵川橋（想定図）



江戸時代 玖波村絵図（称名寺　提供）

㉑ 恵川の橋跡

江戸時代末、玖波を流れる恵川（江川）は、人々から大川とも呼ばれ、現在より少し（６０～７０ｍ）東側を流れていた。幅２間、長さ８間の土橋が架かっていた。

橋の袂に街道松があり、戦後暫く、市内唯一、その姿を留めていた。

その松の傍に「腰掛石」があり、旅人や地元の人々が腰掛けたり、荷物を置いたりして一休みしたという。

本陣から橋に向けての商店街を川端筋といい、栗谷・松ヶ原方面からの人馬や荷車でごった返したのは明治・大正時代だった。炭や薪などを問屋へ運び、帰路の荷は生活必需品や石灰などだった。魚屋、鍛冶屋、呉服屋などの多くの商店が軒を並べていた。

昭和２０年の枕崎台風により、蛇行していた恵川は川筋が変わった。昭和２７年から２８年の河川改修で、現在の流れに姿を変えた。

なお、現在の国道２号線に架かる恵川新橋は日本最初の鋼板桁熔接橋である。